

Handwritten Japanese characters in vertical columns, including characters like 行, 乙, and 三.



5 曾 1  
674  
3 止





傍廂卷之三目錄

脇草

初ラ

非理法權天

日

屠ヲ換ハ鳥頭ト加フニラ

夢アとセニウ

正月事始

四ウ

握符

五ラ

つうふとつうふとのけぢあ

日ウ

そをろともこ日

石の鏃

セラ

國分寺

分

いろは文字

分

廣成の失

九ラ

強盗ト名ノ付スるハ異ル人

日ウ

灰零

十ラ

けき木

日

くごけ

日ウ

作者の名

十ラ

万物

十ラ

得とるコトガ日ウ

日ウ

韃靼國

十ラ

郭公 十四ウ

御位争 三十三ウ

夜鷹鳥 十六ウ

ちん犬 日ウ

毒物 日ウ

さくまぐり 三十四ウ

かきそののり 十七ウ

あめふり 日ウ

劔刀名義 日ウ

ねまゆ 三十五ウ

唐音 十八ウ

鯰尾槍 日ウ

普請作事 十九ウ

顔色土の如し 三十六ウ

神罰 日

神社の星祭 日

言とさくあてをてのさくさく 三十七ウ

神の使 日ウ

まのう あの倫 日ウ

羽倉在満翁の真蹟 三十八ウ

くらづこ 三十九ウ

極樂地獄の繪 三十九ウ

傍廂卷之三

脇草

藤原彦磨隨筆

穂積朝臣の服臭と平群朝臣が嗤てよある 牙万葉集小

小兒等草者勿前八穂藪乎穂積乃阿曾我服草乎可礼

とあるとか茂千蔭翁の畧解小腋下の毛の多く生さるといふとある

とぐへりさぐの喉のえり 一 服草の服臭 二 和名抄小胡冕和岐

久曾人腋下冕如葱豉之氣又謂之狐冕如狐狸之氣とある 是

後世の物語文などあり阿里加とあり 今 倍小和伎我といふ

非理法権天



せしふ其業毒小犯さきて元日の朝悉くみやうてうせさる人  
たれはそお小住ひごうて元日の朝小出奔あうとみんさうさう  
あさうれらさしめて古法の鳥取と用ひしあうんさうさあま  
ふもあはる鳥取と心ねさうてあまのうらと刺さうさあまあり  
とみん我徒山本長孫昌邦か云くあるさうさう敗醬とあひさうてひ  
不のそとねさうと干て薬刺ふ加へしあうとさうさう放るは女所死の  
根なり

夢あはせ

崇神天皇紀小會明兄豊城命以夢辞奏于天皇曰自登街諸山  
尚東而八田弄槍八田擊刀弟活目尊以夢辞奏曰自登御諸山

之嶺繩組四方逐食粟雀天皇相夢謂二子曰兄則一片向東當治  
東國弟是悉臨四方宜繼朕位とありまゝ仁徳天皇紀小昔有  
人往鬼餓宿于野中時二鹿卧傍將及鶏鳴牡鹿謂牝鹿曰吾今夜  
夢之白霜多降之覆吾身是何祥焉牝鹿答曰汝之出行必為人  
見射而死即以白鹽塗其身如霜素之應也時宿人心裏異之未及  
時爽有獵人以射牡鹿而殺是以時人諺曰鳴鹿矣隨相夢也とあり  
この事 核津風土記小ありま本集小

あはせてやいむとらうんぬを玉の愛按の麻の然あま  
かのふ身小おれりあや見えのらんらうりせげ小麻をさくさう

古事記垂仁天皇段小問其后曰見異夢從沙本方暴雨零來急洽

吾面又錦色小蛇纏繞我頸如此之夢是何表也云これの皇孫の兄  
 沙本毘古の及逆ふよりて天皇と刺殺したまふとて小刀と盾ふあふ  
 うる友小天皇の所夢ふあふのまてとて終へればかろあふとあふの  
 まふ小奏しなむりしう沙本毘古と討亡しむし伊弉諾物終ふせむ  
 つける老母の識るぬあふさうあつとと太師次師の情まけりて  
 やくぬとと之師がよき所男あてるとあふせさる可あり宇津大納言  
 物終ふ宇津原の所あふ大かすし之所流トさうるとあふあ牛三  
 ぬ終りんと合せられあふうし之始終ふと後あさうその之位それと  
 あくあふせさうとと是ハ二代の帝の園白あさう終りんと合せられ  
 その如くさう終ひるとたまふ宇津拾遺あ伴大納言終る依

涙玉邪目が從者ふかのふあて終るあふさうやう西大と東大と  
 とまごげて五とと又て妻の女あふさうとあふさうとあふさうと  
 ととさうまんむとあふさうとあふさうとあふさうとあふさうと  
 うるうるとあふさうとあふさうとあふさうとあふさうとあふさうと  
 お人あふさうとあふさうとあふさうとあふさうとあふさうとあふさうと  
 のおせられ終るあふさうとあふさうとあふさうとあふさうとあふさうと  
 まさふとさうんむとあふさうとあふさうとあふさうとあふさうとあふさうと  
 る此の相のあふさうとあふさうとあふさうとあふさうとあふさうとあふさうと  
 位あふさうとあふさうとあふさうとあふさうとあふさうとあふさうと  
 終るあふさうとあふさうとあふさうとあふさうとあふさうとあふさうと

凡俗通代碎符占夢者といふありまべて正夢と名づくこと  
ひと 小人の形をいふありまべて又人の姿を裁き小のありまふのそび  
これすなわち 是れ言靈の幸ひ助け候ふ上つ代より  
ふたふた 皇朝のまじりて外戎の由周礼の夢者事之祥也とありて占  
まじり 夢官のあり草木子ありまじりてごひあり南唐近事圓夢とあり

正月事始

延喜太政官式延喜式小元日天皇受皇太子及群臣朝賀辨官預仰諸司  
辨備 辨備庶事装束辨史等行事前月十三日大臣預點殿上侍從四人左右各  
二人 二人少納言二人奏賀奏瑞各一人簡四位已上 奏聞定之とあり十二月十  
二月 二月小正月の万子の経賞と作て修を是より始くると後世ハ

十二月八日とありと又後小のりて十二月小正月のり始あり  
二月 二月小正月のり始ありとて二月八日とあり始あり  
せし せしと又後小のりて二月八日とあり始あり  
と と争ひ論むる事とあり小のり

握符

師貞丈艸云く推婦小妾産の符と水和和穂あてのまゝむれば  
赤子 赤子其符と握りて生るとり足修験者とり取揚婆と云と  
合 合せてさるるりあて軍羽の腹心の士と使使小同トといふまじりて  
奇 奇美のめひと信トあて悪御の款方小城も所成も棄つれづい

信濃 後のあまの雪深くくそりかのうかきさうねい道

同し先生の軍用紀小神道儒道と好む大徳の佛道と忌きふ  
故小甲曹を外武器の類小梵字又佛像を亦仏説の具と凡  
弾して忌きふすさる佛法小深く淨依の徳士の安法の大徳さう  
とてうさくそむるべしまて大徳の徳軍士の好む新法ひきり  
るもともて大徳士と亦小仏法と亦軍急智畧のささりひ小  
徳さう一表昧あて仏法つうのささるれといそれい今小徳ぬ  
大先生の言端比類あり

そりかのうかき

信濃 後のあまの雪深くくそりかのうかきさうねい道

ありごとくそりかのうかき後夜百首小忠房

初こゆゆれありあけくさあちふさの旅人とりかのうかき

の儀のりとりのねの史記小泥行乗のりとあり孟康云のり形如箕のり行  
泥上のり云如淳云以板置其泥上以通行路也と注せり正義云のり形  
如船而短小兩頭微起人曲一脚泥上のり擡進用拾泥上之物云三才  
圖繪云前頭及兩邊昂起如箕云和漢三才圖會云以板為之其形  
如箕のり擡行泥上者也とありかきま本集小仲正

かきまのうかきの山溪の縁をさるる小志のまぬがとまふところ  
西の法師家集小

あちふさうくさるる谷のあかきさの及つくとまふところ



和漢三才圖會フカサキニチカサニシズン其形似錐長半寸施之履下以為上山不蹉跌也カニモテ履下ニシテ上山ニシテ蹉跌セズ

按如越州北地雪深而不乘輜不能行不着標不得上也越州北地ニシテ雪深ニシテ輜ヲ乗ラズニシテ行ケズ標ヲ着ケズニシテ上ルベカラズ

石の鏃

出羽玉名内之原の所内人某が石の鏃出羽玉名内ノ原ノ所内人某ガ石ノ鏃りて来りて緒り緒リくク近き色の海辺近キ色ノ海辺めて人ヒトひうヒウふフありアリといトイわワれレ新ニ代ニ小コ新ニ軍ニのノ鏃ノありアリともトモ又マいイ坂ノ夷ノ人ノのノ鏃ノくクもモよりヨリ原ノのノ羽ノまマとト小コ附ノとト為ニせセりリきキんンとトむムうウよりヨリひヒつツくクとトてテ二ニ三ニめメざザくクりリ續ツ日本ニ紀ノ仁ノ明ノ天ノ皇ノ

兼和六年冬十月乙丑出羽國言公八月廿九日管田川郡司解備兼和六年冬十月乙丑出羽國言公八月廿九日管田川郡司解備此郡西濱達府之程五十餘里本自無石而從二月三日霖雨無止此郡西濱達府之程五十餘里本自無石而從二月三日霖雨無止雷電鬪聲經十五日乃見晴天時向海畔自然隕石其數不少雷電鬪聲經十五日乃見晴天時向海畔自然隕石其數不少

或似鋒或白或黑或青或赤凡厥狀體銳皆向西莖則向東詢  
 干故老所未曾見國司商量  
 此瀆沙地而徑寸之石自古無有  
 仍上言者其所進上兵象之石  
 數十枚收之外記局勅曰陸奥出羽并  
 太宰府等若有機變隨宜行之且以  
 上言克制權變令禦不虞云

三代實錄小元慶八年九月廿九日出羽國  
 言六月廿六日秋田城雷雨晦冥雨石鏃廿三枚  
 仁  
 和元年六月廿  
 一日出羽國秋田城中及飽海郡神宮寺西濱雨石鏃同二年二月

護

出羽國飽海郡諸神社邊雨石鏃云 我  
 ありきあり 灰色ありあり 黄とあびるあり

國分寺

云云の尾ありとて諸  
 古尾と云中より  
 堀を  
 小  
 あり  
 續日本紀天平十九年十一月己卯詔曰朕以去天平十三年  
 二月十四日云 遍詔天下諸國國別令造金光明寺法華寺云又  
 同紀廢帝天平宝字四年六月云 創建東大寺及天下國分寺  
 云云 續日本後紀仁明天皇養和六年六月勅國分二寺建  
 立自遠一則名為金明護國寺一則号为法華滅罪寺先帝救  
 世利物之法遠傳不朽者也その堀を新の尾古の堀

あまの寺建立の遅速ありし故に

札

いろは文字

書史會要日本國於宋景德三年嘗有僧入貢不通華言善筆札命以牘對名寂昭彼國自國字母僅四十七能通識之便可解音義去の景德といひ外戎の宋真宗が年号ありて一條天皇の寛弘三年小兒の子習の撰ありて源光波津清秀の二首の号とて見氏相類小もありて人のある所と二首ありて六十余字ありて同字多ありて小五十韻ありてもありてあまの後小の白へと云の今撰めきとる長考の同字ありければいつとて是とて習の撰ありしとて

表

いろはの二字ありて同字一ありある所小思きとるなり又五七言のあまの人の人なる小ありて二の月一言さねともしやむとてはるるその字解むいと思きとるるれば異根小ゆきと楷書の原の畧さればことおあはれ楷書の畧する所の外戎人の目ありてはるる日本のお字といひしはるるしに事

廣成の失

中尾敏於お家お並びて重き職業ありしと中尾氏の意業え敏於氏のつぎくおおとてく廣成といひて古語拾遺とありてせしことそりありるひる述懐とさると拾遺小使天伴遠祖天忍日命師來目部遠祖天穗津大來目帶仗前駈云と記せし

大伴氏の榮え久米氏のかとらへる後の意りて律代紀小あり  
後ひととみたるらんされとごう中臣氏の榮え存於氏のかとら  
へて致款久米氏ともありれば大伴氏とひとと並ぶべきあり  
脱小 ○ 皇孫のりり孫の時の大伴久米お用ごりし古事記  
あ天忍日命大久米命と等く記されたり是七上古の尊祖徳ある  
強盗と名の附さる小異なる人

砂石集小ある南都の強盗法師のれ強盗の中小交りて人の家  
小入財と奪ひ盗人ども小あてておのれとてばさてあまこの盗  
人小敬りまつきく小教化して佛及小まめりれ灰小強盗法師  
とりり又徳孫小ある柀系たきぎの強盗法師の夜強盗小遊する

灰小世小強盗法師といわれ一人名同トて故いりて又之砂石  
集の柀系平之景時が孫位法師の作又徳孫のト於義顯の  
子の兼好法師の作也

灰零

天武天皇九年六月八日灰零と所紀小あり其後續日本後紀  
仁明天皇兼和五年有物如灰從天而雨老農名此物米華の老  
十歳の以安永八年十月朔日灰ありと事ありて是えあり其後十  
歳の以天明三年七月江戸中戸障子等き衆勅して大穴くく  
灰ありと人あやととに又日過てきけの依濃小法る小焼ととん

けき本

千葉葛根 根挿玉へ施磨してけき本とのみねのりてえなりね後甲  
 二玉の場の中心小立する概の根へ中心小立する本ふき本とのみね  
 玉網少てらる本とのみねとすふくんとすへ 実録公のき本とよと  
 しも是あてよりす西とすへりゆとありうき車之我差うりし甲斐玉  
 より 刑部刑部刑部といふ人きよの伴ある 秀齋縣主へ後と東りて  
 相續るとするふ初合てさるふり常ありし本をわけねつあやなりね  
 らんとすへり早九つの時あやなりんとすへり古今葉の甲斐元のけ  
 きあく横とすあせるとかの金穂集のき本と刑部かけねつと  
 并公せり

くさくさけ

伴物語小

秋もあけがきのふとあめんさくさけのまきふさだてせんとすへり  
 とあるさくさけとあくさくさけのまきふさだてせんとすへり  
 かけが鶏の名こととありさくさけのまきふさだてせんとすへり  
 古事記み波都登理迦祁波那久とある庭津鳥鶏と野津鳥  
 雉と對句ふさくさけのまきふさだてせんとすへり  
 松上吉小字音いりりありつとも家のけあてカあけのけり羽ひす  
 漢吳音の吳別あめんぬ人のりふ事之又さくさけのまきふさだてせんとすへり  
 の説いさるふもさくさけ唐九矮鶏暹羅南京ふむえて百濟鶏さくさけ  
 のいあまうりふらぐらさくさけ梵語の知羅俱吒といへるも東玉の行田舎の

賤女あひ似げり死脱へ又救さるる鳴衣ふ園籠へとのへるさるる  
 交ゆまこと愁念とぐり溜りのしをいへるなれば府内籠とる頑狂美とる  
 りの義あるる一吉事記ふ宇礼多ク母那久那留登理加許能登理母  
 宇知夜米許世泥云とあるも打令病乞めておてあやませよとのり  
 念ん万葉集ふ馬とふ大おそる又とふとぎんまとあるもあつこ  
 のしるる遊仙窟ふ可憎病鵲夜半驚人薄媚狂鷄三更唱曉云され  
 ばとる情このある納めてけい香の名之林樂守ふ庭をいけろと  
 るまぬとあるぬく時夢より名といりしと

作者の名

哥の集ふ天皇の御名とぬいりふまでもあり大段も名とぬい

さるるひん親まの御名とぬいれとことあまが終まありに位の某  
 親長とあれは是又終まありいふされが納む下之位の上の階の  
 と某卿とありまざりらん必卿とあるべきと又位以下と答へ並ふ  
 名と去叙ちふせんりあるまふい敬へ

万物

禽獸虫魚草木砂石の類人の用ふまきさめふ二柱産霊神の  
 所恩頼より成ゆるあり食料と肯とて薬品殿屋雜具器財  
 悉く人の用ふまきさるるのつらさどり終ふ終ふ二柱大神より  
 任ト終るる御史ふ明らんとさると譚子ふ禽獸于人也何異有巢  
 穴之居有夫婦之配有父子之性有生死之情云浄土文ふ魚在

水中亦有眷屬腹中多子云云  
 水中之親子の情ありげきと成長してのそとさあある  
 おもあつむかふおもくおも食料薬品器物用んりまんの  
 ひかともあつん園菜花菜も親あり子あり兄弟ありまんと  
 いろふも理屈のいさつと抱りいとあつるるりあだありなる

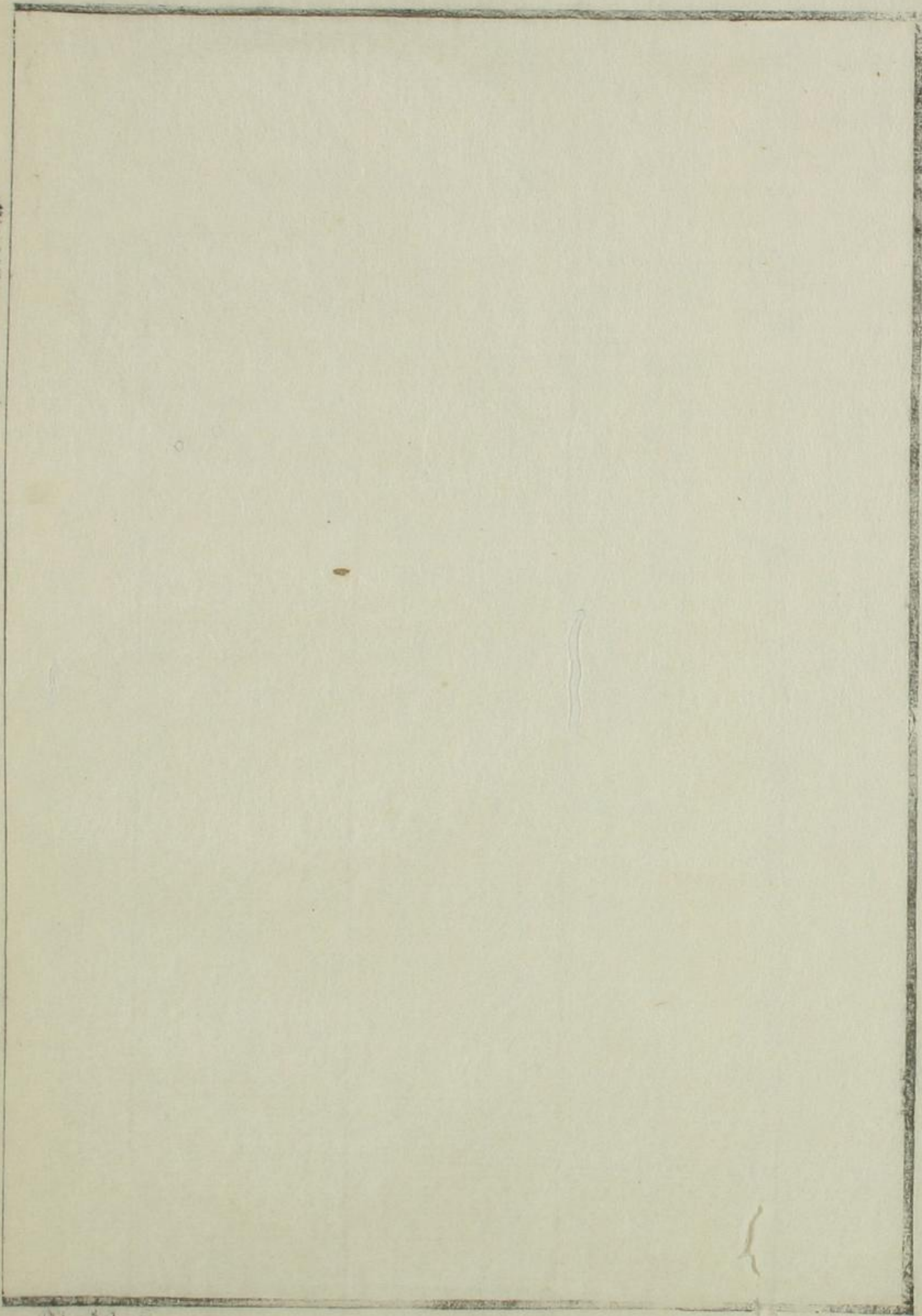
得るもの

ゆさるまぎあつるおもひもけぬ幸あるものあり  
 とりくといとねあぬ役者ある時本所迄のさ親人のゆさ  
 根くれゆさるが教文のゆさふさあどさあて  
 うさふ割下あの色あて傘あつて  
 けぬとのせさるが如くいうふ

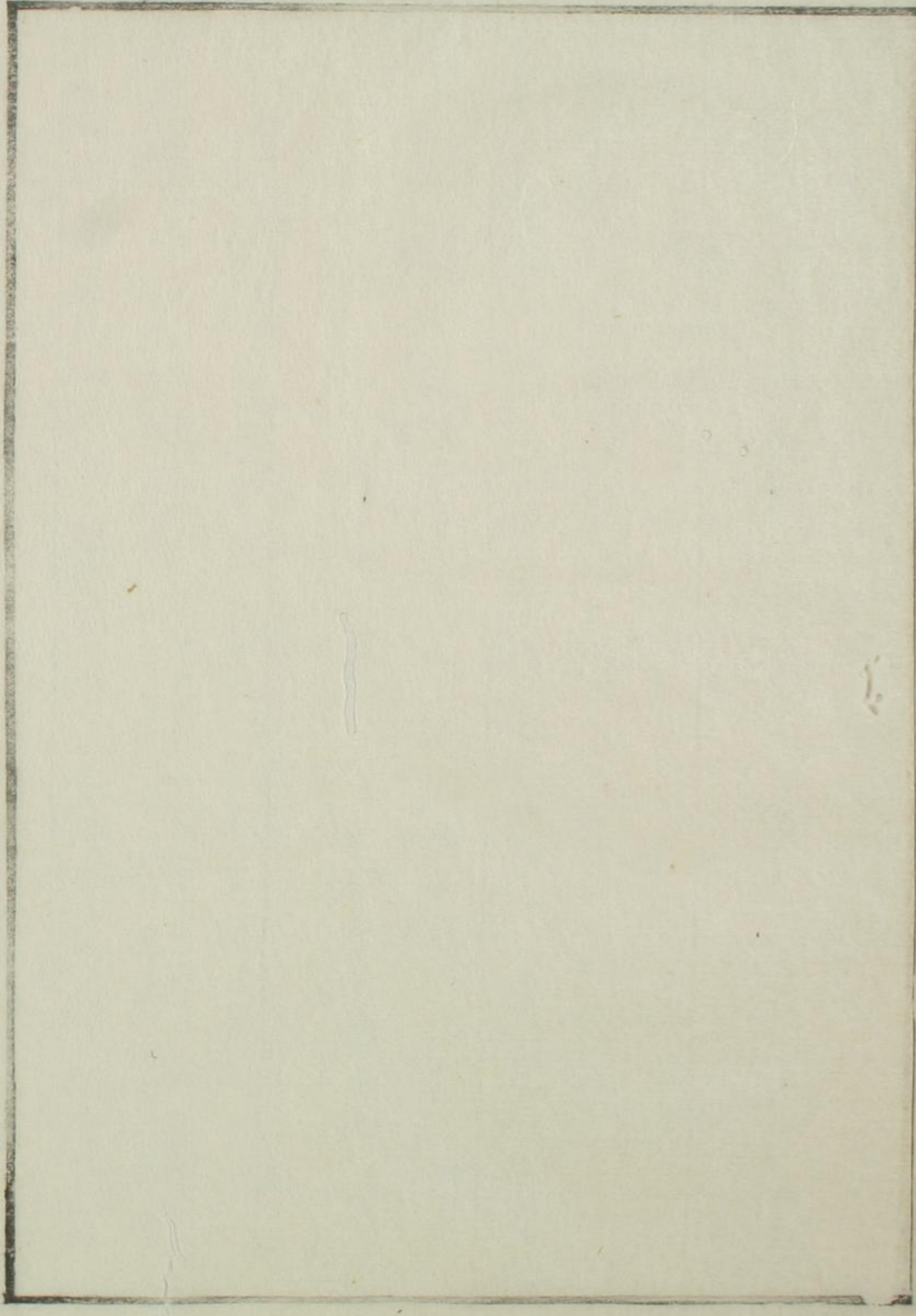
韃靼國

とせんとさるる人ふ小挑灯の風ふれぬわあうトそと  
 大あ祭して不意中ぐりしてさるるふゆさるる人さあ  
 かどうき燈火りて来てそれを吾等の傘さああさささあ  
 立居るに五つをり先ふゆさるるおけらさて  
 うりともんゆき役者おれバ常ふさき役者お投げらさて中ぐり  
 さるるりおれぬさるるさあてあひさけぬさささあさあさあ  
 役者の中さあさあさあ

天智天皇紀小藤將軍与突厥王子契苾加力等水陸二路至  
 干高麗城下云云の突厥の即韃靼なり  
 韻會小金山狀如兜鍪



續  
自  
卷  
三







そふらうまのさびさびとく宗鑑が故のうつけさやゆらんといふ  
 子親の音夢とてうけあるものやいそんといふれう彦麿云く  
 降霧の鏡実ふさるるひありされど愁りくもゆきくもかきくも  
 かきくもゆき人の心の表愁哀樂ふほひていふゆきあさう  
 さればあまがらふ愁りきこのこもあはれ照のそのもたさあぬ  
 一夢ゆきこけゆかまの村おのちれるふ名のうけつるふとむげふ愁り  
 一くゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
 さいまゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
 佐のゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
 りんさうとてされうまるといふゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
 一

夜鷹

夜發といへる猿は花女と秋夜といへる車と和名類聚抄に  
 惟鴟与多加晝伏夜行鳴以為拵者也とあり  
 一名隻狐といふ不祥の怪をくさてふ川打ふ  
 旋女云晝旋行謂之旋女待夜而發其淫  
 奔者謂之夜發云今井良梟が荏原郡  
 戸越村小佐ひる流さうけらくさそぐれのひ  
 のひ本立の老げこより立出る音あり及ゆ  
 のけさぬ伏辰ると人けけうねまひまて  
 二二丈もきて又娘のとあまともんさうけらひたふま

あまの宮うみんえねとやうみまづめやあつんとあふさあうと終  
まう是教なるあふべうたぬあまあふ教なるとあふああうん

毒物

在系那石川村の毒の

道路のう人の草村小

月なれぬ草丸ありと

来かうする農まふひ

くれが毒おんととてて

のあうとらえぬひ

しふとのころる茶小の本

小由大毒小毒あつたあまこころと是の毒おこしつらうしつらう  
津衣依名あつたごごととあひつふ後を飾る物産医小同ひらまひ依小  
毒の本とのり漢衣の木本黄精葉鈎吻とらんひらる天野信景の陰  
尻小荒花とのひて毒おありと川北の紀と突く菰小似う二尺斗の小本  
あて紫荊樹小似うとあつたあまこころと

かきまねる毒

皇朝あてかきまねとあけいふからうとつ衣外戎あて鳥とも鴉とも号  
しゆ声あつたまてての獣の毒人の言語とつらひつらうあつた人の  
耳小あつていう小由まねるあつたあつた枕ま子小曉がこころつらう  
忘まてねらうつらう小鳥のつらうと近くかうとあつた小云續綱苑集小



せて考へ定めても故実ふとむける後らけごとくといふまじゆの人  
ゆひやこころ

唐音

皇朝めて改め進されたる漢音とあり外戒より傳へ韻ありと  
あつた非之大學論緒などタイカクリンキヨとよむの漢音よりダイガク  
ロソゴとよむの吳音とよむの友小皇朝政正の音とよむの遊音よりダイガク  
けくく安永九年六月南系和安房五千余漢小漂居の時ふにたより  
藍田東龜年といふ人初めて唐人鄭益といふ人の清音とよむふまに  
て大學之道在明明徳在親民在止於至善云といふより游房筆  
話ふんごうとよむとあり我のいまごとの筆録とよむ一月のときさき

はより我門あり

普請作事

殿屋造営と普請とも作事もいふの佛事より出たる名目のより  
ト学集の普請諸人作事故古普請也とありて和尔雅の佛家謂  
營作家屋為普請教修清規云普請之法蓋上々均力也分付堂司者  
報衆掛普請牌云さうり用んよりいひあへよりいひまねるまゝあて  
上らういひのづらう下らういひやづらうあてりさうぬべー

神罰

文化の始の改下総と海上郡熊子郷より二三里むらりの在あて或  
寺の普請小村本と求めんごとくて迎き色の小社の村本といふ松と

買てきせりる小を松倒まんうて傍の楠の幹小地より之尺

をうりよめて

斜小附する

まゝめて致

まゝに致

大松中楠

友小愈付て

宗えさう神主

寺僧より大熱祭して

六七日程小根ひ死さう本挽也

大熱祭おほねつまつりぬまことひこさう小助命こすけのみことと致なげひ全快の上神樂せんがいのうじんがと奏そうせんりて

ひ本挽このびきの職業しごくやむべきやうして致なげひとびき本挽このびきの助命すけのみことと我わがりさう

存命ぞんめいありしなり其根そのねと足あしふゆき小楠こくすの根ねより之これは尺せきも上うへ小楠こくすより

大なるおほなる根ねありぬつきてらうよりまろ根ねの切きりは正月しょうげつの如ごとくさうたたふふ見み

えながう宗そうえさう又中なかつ挽びきの版ばん忌い古ふる縁えん神社じんが小こ由ゆさるさる致なげのこひひし

とあり又また炭すす濃のう玉たま某その村むらとありてまままま由ゆ寺てら院いん作しやく像ざうのたるる近ちかきき不ふささの

小社こしゃのじんが神かみ木ぎとさうさうんとまるまる小こ神かみ主ぬしゆるゆるささんん神かみ木ぎと汚よご穢せのせう坊ぼう小こせん

りりひひももささんんとといいふふ同どう約ぎやくとといいふふ者ものの中なか小こ人ひととといいふふ者ものありてあり仏ぶつ

ののははるる古ふるののははるるれれがが我われをを神かみ木ぎとと穢せけけととちちりり引ひききんんとといいひひてて其その致なげ

神かみ木ぎありてあり之これはは死しさうさう依よてて切きりささててささととちちりり引ひききんんとといいひひてて其その致なげ

のさしを大熱めて死さうとまき男の家内親族は若く亡びたり又  
天保の九年の以尾張の名古屋にて久米侯と清隆十所二人父侯を死  
骸と東内町日蓮流本住吉の徳化悦山といふ信と申合せ熱田神宮の  
一の鳥居とありぬけせと神意とあるが如き法の下りありとて悉く逃放  
しおせらまさう世の希のさとの老由あるおありたりそ若者のそく  
いふふりゆけんその久米氏の子孫一統悉く零落して大に敗れて佐来の  
人お抱えふかくありとてさういふ小由我とへ子あれば妻とてさう  
逃放しおせらまさう頭露政事正し故に一族悉く零落せし神幽政  
事しりゆき故に世にてもおるべからぬ公の所授く畏くても畏むべし神  
慮の所定なり

言とすうか入し心とすいへんはなる事

万葉集小

あまの浦人のぬりゆきさしはあまの浦のさしゆりゆきさしはあまの浦  
是と停指お終あ

あまの浦人のぬりゆきさしはあまの浦のさしゆりゆきさしはあまの浦  
万葉集小の解指あてしお終あは化指の免ぐ又万葉集小  
あひらき世とるをれを古事小にひきまきまをあひらあつるがふ

あまの浦のわらわしはあまの浦のわらわしはあまの浦のわらわしはあまの浦  
あまの浦のわらわしはあまの浦のわらわしはあまの浦のわらわしはあまの浦  
あまの浦のわらわしはあまの浦のわらわしはあまの浦のわらわしはあまの浦





まがぬ一学辨心一々やうふらたて誰が目もよらまのり音  
さやうふわ十音正一々声清濁明らあてやうまゆのがくまうあ  
とてものよりあいつく言と駕を假名とてうまてあとなと  
礼さげ言のさやうあつてくまきんひやうとてそのかくひの松  
うればとよあう心あうせううおふあんありら。

くらづこ

いあへ文字の礼世あははくおお供て存て忘きさうりや古縁拾遺  
あり天武天皇の所代小裨田阿礼の二十八葉ありて物語の古事と常小  
は小補と心小勅して忘きまを八十餘葉ありて元明天皇所承ありて終り  
る事古事記序あり師承の傳小書一々いそれうとており人を

部

外我淳文帝の時小伏勝老夫が九十餘葉ありてくらづこ傳小大常固  
晁備と遺して古傳と終らせ去しめらるる老經蒙勝且部言ありて通ト  
がうとへ阿礼と伏勝との同日の終ありて

御位争

惟喬親王と清和天皇所講 惟仁と所位争ひ小紀名虎と伴長雄と相撲の  
勝負ありて定め終ひしうりつとて人新由ありつとて惟喬親王の  
兼和十一年所誕生ありて同十一年あり紀名虎卒せり変りて二年と終  
て嘉祥二年の四月清和天皇所誕生同年十月立坊ありて皇太子小  
あり終ひ八年と終て天安二年小文徳天皇崩御し終ひ直小清和天皇  
所即位され争ひる小極の旨のなりしとて後貞観八年小伴長雄罪

ありて伊豆島へ流罪あり是れお僕小孫さるの御る能るなり惟喬親  
王の貞親十一年小病ありて出家沙門となり後弘寛平九年小薨  
後へり所史とあるべし石法ありて十番の競馬のり大門ありて名虎  
と若雄と角力のり又東ありて紀伊正長海と延暦寺ありて惠亮和尚と  
精力を尽して大威徳と隆二世との力ありてなるとつらとくさるん

ちん犬

倭犬とチンとのひて神字とありてこれと非之神の字書小狂也とありて  
くふり小犬のチンの字音ありてちのぬの音便ありてちのぬのちひさのぬの  
界之もと皇初のおるねのぬの類聚國史小淳和天皇天長元  
年四月丙申覽越前國所進渤海國信物并大使貞泰等別貢物又契丹

契

大狗二口倭子二口在前進之あり皇朝小倭犬とありて  
オホイヌニツクニツクアリサキニツクニツク

さくらざり

さくらざりの延喜祝詞式小高山の末短山の末ありさくらざりの真下垂あり  
あのかつさるのさくらひさると賣物行道者のよむべし俗本ありさくらざり  
佐久良谷と懸まうさると近に石山の色の川小橋の滝といふとつらとくその  
りく又ろの大被網小大津邊尔居大船乃云とあり船着の湊ありと近に  
の大津と彼方の繁木がもとと云とある彼方と山城の字派の彼方小附會  
せり又近に藤右那佐久那度神社とさくらざりのより所とつらとくといとあり  
その古事記神代紀も道郷食祭祝詞もある久那度神ありて此處より此方へ  
来りて勿きと宣後ひてさくらざり所杖よりあり出後ひて神のまはる契未

所の養へ真下垂るといふ大い異へ

あぬる薬

此病長壽の爲ふ不死の至薬の大同類聚方本草などありて人の  
欲するよりあると源氏揚巻ふ字派の大衆衆今の時ふ甚大なる  
急つひてあぬる薬のゆくきふ山あやれとつけま

とあふ釈迦因位ふを童子といひ一時干支杖双理ふ法といひ一諸  
行無常是生滅法とすひて汝の餓てのふ子能を食といふさうか  
る食ふと同いハ血肉と食んと云ふ童子我身とあへん末といふ  
生滅滅已寂滅為樂とすこれ童子の石壁ふ出つけて谷へ死し  
鬼のにより蓮花わて童子と交りる鬼の帝釈天へと阿含經本作

藥

そこの薬のて蒸のよとほひしとされバ次の文ふすある偈とらん鬼由  
かよとあつげて身もるげんとお不さる心ぎこころきひとまごらるる  
ことありまの偈の涅槃經ふありいろふも仏法の死とつさるるおるま  
あぬる薬のめめんあふのふは教あぞありるさうや毒薬と用  
ひは肝付ふ死あつるりのと

朝のゆめ

朝の夕のあふ朝の夕の急業のりといふるの業業集のかり字がたさ  
然とつて入るるあそのまゆめのみといふりあけ之間の及いあこま  
の夜間と昼と昼間といふも夜とよといふも夜間の養へ夜半のかり  
文字ふるつとて涼萩のりといふるの非あり

鯨尾槍

増鏡あり新井白石翁云二條宰相中将さねりも石捕られぬ之  
 条の家小借りて鯨尾と名り刀ありるとその中御目改りて  
 かの浅原自害しとすと名えたる心懸二年二月九日の事あり  
 其文字の如く造りしと相とゆふやとあり彦丸思ふ鯨尾  
 槍は今の長刀より一白刃の槍とあり小惑りれりるべし長刀も槍  
 の中のひとりの浅原八郎を斬り甲斐源氏小笠原の一族して  
 籍者之徳とありきその所より紫宸殿よりけりて自害  
 せり射物とる矢小大政大臣源為朝と書記しる之法のありき若  
 東鑑脱漏あり

顔色土の如し

おふと怖く血色と失ひする人の顔色と土の如しといふ  
 質廉る小射く外とありてめりて長恨哥小顧左右前後紛色  
 如土とあり揚貴妃一人小色とありて源氏物語の  
 まこと小女などのありて是れ是れ大拍の目あり女一宮と  
 ありて月あり

神社の星祭

近き頃賣神道の神主が土月冬立あいの社の神主殿より門前より星祭の  
 看板とありていふ世にその為の神主をせんお小神社小様と祀る  
 しき罪之延喜式小九齋王將入太神宮之時自九月一日京畿内伊勢近江等

以不の燈事  
多なりと回を  
あけてまべ

國不得奉燈北辰及舉哀改葬とあり日本後紀云禁今日祭北辰舉哀改葬等  
事以齋内親王入伊勢也まゝ續日本後紀云禁京幾之内來月供北辰燈以齋  
親王可入伊勢也めく歳重なる年の外戎あてとて日月星と等しくあひて  
日月と等しくとも星と等しくともあひてとて日月星の畏くするきひのひまで  
わろし星のそれと等しく並みあはせといひてとてを務め同下とてひなると  
ことごとくあひてあはれ外戎凡るれい様へ

神の使

佃島住吉の神主の代々日向守といひ好弘好祖今の好貞ともふ二代ついでて  
我門守への代々の海人の冬より春まで白鳥とむねと漢より春より  
とくもれりあまの島一人同小神主小祈禱とありてを祭記あはせり

糶と二白木基小居て神前小備へ神系終りて海小放つ小志をの極の旁  
まゝさあされと海小入ていきりひもあのかく沖の方へちをりたり是の  
任者神よりまゝつこの神へのまま使めて白鳥をせ給へといひやるなりと  
ひの使へりさるりありて天照太神様と使と一給ひりあり春日神  
の麻と使ひ給ひ石清水八幡神の使と使ひ給ひ飯沼神の使とつひひ  
稲荷山の神の使と使ひ給ひ熊野の神の使と使ひ給ひ松尾神の使と  
使ひ給ひ息吹山の神の使と使ひ給ひ猪と使ひ給ひ氣比の神の使と使ひ給ひ  
神ももつういへあまの島よりて是く近き以下總玉船橋太神の使する麻  
と下の老六人あて打殺し喰さる小を者とものかたの他のかたとへて  
ぬき〜小一対小焼失妻六人同対小大熱発して同対小死亡せり妻六人

祭  
百  
三

三二

の中あり折く見えさるもあり焼失の二に目して紙移へりし時小七の  
焼依とゆりてり

羽倉在満翁の真蹟

或人直海翁の真蹟とてりて来りしと美傳のあをを巻め置つと富永  
其款かをりてあふゆりてり又紙の大きさを紙小待懐袋のめりか  
まてり 春日旋小田原賦得海上眺望荷田在満時蒙春日霞渡流海面  
面波阿婆登應見遠山難追馬とかまてり是て時蒙春日霞渡流海面  
波阿婆登應見遠山難追馬との春日とるふらあてり又追馬の二字  
ハその一言小羽りてり万葉あり又馬のりてりともおびんとよてり  
といひてり追ふのあ世の作言あり

霞

極樂地獄の繪

寺院みある所の極樂の繪ハ佛と作れ諸菩薩も皆がう肩ぬぎて  
南天竺の熱玉のさるさればさもあるべしいうるん地獄の絵ハ閻魔  
王と作れ十王冥官獄卒まで皆唐の姿めて罪人の悉く日本玉の  
慶長元和以後の月代刺さる姿ふあつて作者のあつて画工の拙  
さうあまうる愚昧の志ささりさる救ふさあてりといへるおさう  
出来さるふも端までとれ十王とも冥友獄卒あいつるまで悉くか  
のめくふして一人當千の勇士所くおかして暫時小閻魔とあか  
殺し或ハ生捕て忽ち地獄破却ふ及びさあみつりし英雄の勇士の  
悉く 皇朝入て外戎の張良樊噲関羽張亮などのさびさび

へを地極極楽と作てあひよりてつらし人よりゆさよあゝの作者  
 をまさうらうる正法念經の閻羅獄卒非實有情以衆生妄業力  
 故見之とあるが證あり

傍 廂 卷 之 三

